

干瓢業界 新生の兆し



「かんぴょうムキむきコンテスト」

まるつねの企画で開催

名産の干瓢産地と生産加工現場で、若者に干瓢の見学と剥(む)きを体験してもらい、農業の大変さと喜びについて考えてもらおうと企画された。

同社は、栃木県立那須拓陽高校生活文化科の生徒40人を招待。干瓢剥き名人の須釜一雄氏(79歳)による模範剥きに始まり、生徒有志5人が干瓢剥きにチャレンジ。須釜氏が一番迫力ある干瓢を剥いた「ムキむきナンバーワン」を決定。また、同社作成の「ふくべ携帯ストラップ」が、生徒全員にプレゼントされた。

干瓢栽培は、土作りから、わらなど資材の手配、炎天下での摘心、夜まで続く花合わせなど、他の農産物に比べて過酷な状況での作業。このため、丸々太った、つややかなフクベを収穫できる喜びの裏には、農家の膨大な苦勞の積み重ねがある。フクベを剥く作業は、

朝2時ごろから始める大変な作業だ。

しかし、戸崎社長は「大変、大変と連呼しても気が滅入るだけなので、この機会に楽しく、干瓢剥きを体験してもらおうと、コンテスト開催を企画した」と語る。

こうした試みが、干瓢業界で徐々に目立ち始めた。その動きは、業界活性化に向けた新たな模索にも見える。(板橋英俊)

干瓢業界が、新生の兆しを見せている。(俣まるつね)
ね(栃木県下都賀郡、0282・82・0224、戸崎泰秀代表取締役社長)がこのほど開催した「かんぴょうムキむきコンテスト」写真もその一つだ。このコンテストは、栃木

2006年
編集スローガン

改ざん防止
機能容器

NTN Mシリーズ

容器本体のツマミを切り取る事によって初めて蓋の開閉が可能となります

蓋の開け方

①ツマミを切り取る

